紅梅・竹河巻と橋姫物語試論

小島繁一

一、継子いじめ譚の系譜

源氏物語は、不遇な生活を送っている女君を素晴しい男君である光源氏が救い出す、と語っていく。光源氏は、空蟬・夕顔・紫上・末摘花などを救い出す。彼女たちの不遇さは、早く実母や父を亡くしている点で共通している。[①] ここには何か物語史的な意味が潜んでいるように思われるのである。

大和物語百四十二段は、世を憂い、結婚もせずに生涯を終える継娘の姿を語っている。落窪物語での落窪の姫君は、「女親のおはせぬに、さいはひなき身と知りて、いかで死なんと思ふ心深し」（四七）「親にとくおくれて、心もはかくしからずぞあらんかし」（四九）と、自分の身の不如意を嘆き、その原因を実母のいない点に求めている。現存している住吉物語においても、「母なからむものは、世になからふましき事にこそ」（九四）[②]「あまになりて、母の後世をも、とふらひ侍らむ」（九七）と、姫君は実母を亡くしており、そこに憂いの因があると語っている。これらに示されているように、姫君たちは不遇な生活を送っているが、共通しているのは母を早く亡くしているということである。

物語の主人公の条件は「王統家流」の「一人子」であるといわれる。[③] が、それだけではなく、母の欠損[④]という点をもあげねばならないのではないだろうか。それらは、母の欠損を担っている点で、他の一般の者と選別された位置を保っている。母の欠損が一つの徴（しるし）であり、神話論的にみるならば、その点において、「聖なるもの」ということができるであろう。[⑤] その聖性の表象は、物語には、顔かたち、性格などが優れていると語られる。光源氏が「世になく、清らなる、玉のをのこ御子」「この世の物ならず清ら」であるのも、王統家流の一人子であるだけでなく、神話論的には母の欠損があったのである。宇津保物語の忠こそも母を亡くしており、母は「一世の源氏」で、一人子であり、それゆえ「玉光り輝きたる」なのである。大和物語の継娘は「いとらうくじく」とある。落窪の姫君は「わ

かうどほり腹」の一人子で、心ばえが優れている。住吉物語の姫君は母が「御かとの御娘」で、一人子で、「ひかるほとの女君」「ひかりさしそふ」とある。堤中納言物語の貝合の姫君も「この世のものとも見えず美しき」とある。

神話論的に母の欠損が聖別されたものたりうるという条件は、物語では姫君の不遇さや、身の不安定さとして深められていく道筋をたどっていくことになる。蜻蛉日記冒頭近くに、兼家とのやりとりや代筆をしたのが母＝「古代なる人」であったと記されている。娘は母の保護と導きのもとではじめて、「世の中」とのかかわりをもつことができた。母のいない娘には、生きるということの方法がわからないということを意味した。落窪の姫君も母なきゆえの世づかぬ自分を感じている。「琴なども習はす人あらば、いとよくしつべけれども、誰かは教へん」（四四）とある。琴の伝授の問題とはいえ、受け継ぐべきものを断たれている姫君の孤立した姿が象徴的に表れている。男の懸想文に対しても、「いみじう物のつゝましきうちに、かやうの文もまだ見知らざりければ、いかにいふとも、知らぬにやあらむ」（五〇）と、途方にくれる。継子が世を憂うのは、継母のいじめの有無だけが重要なのではない。継子は、生き方の導き手を失っていることによって、不安定な位置に立たされており、継子自身も不安な存在感を抱いているのである。

落窪物語や住吉物語では、不遇な姫君は苦難の後、救い出され、めでたしめでたしで終わる。が、源氏物語では、空蟬は拒み、夕顔は救出される前に死に、末摘花は当然備わっているべき顔かたちの美しさを欠如しているなど、先行の単純な筋とは異なる。紫上は救出されるが、継子いじめは周到に回避されていることを見逃がしてはならない。[6] 源氏物語は、神話から受け継ぐところの、母なき子の存在を、その不安定な存在感としてとらえ、平安時代の現実の中において考えていくという道筋を深めていくように思われる。落窪の姫君や住吉物語の姫君の抱いた存在の不安定さは、結局は男の救出によって解消される。が、源氏物語はそうした結末に安住しない。そのことは、紫上のその後の苦悩をみれば明らかとなろう。

継娘が貴顕の男性に救い出されるときの婚姻形態は「すゑ」といわれるものとなる。その婚姻の対象となるのは貧女や孤女、または男に比して以下の身分の女である。[7] 紫上もそうであった。この形態は男と女の純粋な愛情の帰結である、とともに、女の側の現実での社会的身分、位置の薄弱さと表裏の関係にあった、ということにも注意を向けなければならない。朝顔巻で紫上に突きつけられたものの一つは、彼女の社会的位置の弱さともいうべきものだった。篠原昭二氏は、朝顔の姫君の結婚拒否が後見をもたぬゆえのものであるとし、継子の問題を背後にみておられる。[8] 肯首されよう。であると

すると、朝顔の姫君の側の、後見をもたぬゆえの結婚拒否が強く主張されればされるほど、身分の高い光源氏に今、「すゑ」られている紫上の位置自身もいかに弱いものであるかを鮮明に印象づける結果になっていることが読みとれる。続いて紫上を揺さぶることになる玉鬘が登場する。朝顔の姫君に続いて登場する玉鬘も継子の色濃い人物であったことは[9]興味ある符牒といえる。であるならば、玉鬘と役割を入れ替わるように登場してくる女三宮も、継子という面から考えていくことが可能となってこよう。王統家流の一人子であり、「世（の）中を恨みたるやうにて、亡せ給ひにし、その御腹の女三（の）宮」（Ⅲ二一二）とある。女三宮も神話論的には「聖なるもの」であり、必ず優れた特質をもつ者であるはずだった。男君が継娘を希求するのは理由があったのである。光源氏も当然そう考え、求めた。が、「昔の心ならましかば、うたて、心劣りせましを」（Ⅲ二五六）と、落胆を禁じえない女であった。継子が聖性をもつ、という神話論的な系譜がここでは空無化されている、あるいは逆転させられているということができる。女三宮降嫁は、紫上の社会的位置の弱さを以前にもまして露骨に浮かびあがらせた。左中弁の言葉にもそれは明らかである。統括的にいえば、継子をめぐる問題が現実の次元に引きずりおろされている、ということなのである。女三宮においても、紫上においても。とりわけ、紫上は、継子が苦難の後、救出され、福を得るという結末とは全く異なる、継子の担う不安定な存在感を深め、現実社会での位置の弱さや生き難さをたどっていくのであった。若菜巻以降の姫君たちもいうまでもなく、この系譜上に位置づけることができるのである。

二、紅梅巻と継子いじめ譚

源氏物語は先行の継子をめぐる物語から、現実社会での女の生き難さを問いつめていくことになった。夕霧巻の落葉宮も、母がいる設定ではあるが、その背後には継子的な不安定な存在感が影を落としている。宇治の姫君たちにこれは続いていくが、そのとき、間にはさまる紅梅巻こそ中継を果たす重要な意義を担う巻であることがわかってくるのである。[10]

匂宮巻では光源氏没後の世界と、そこに生きる薫と匂宮とが抽象的に語られる。紅梅巻は按察大納言一家、竹河巻は鬚黒亡き玉鬘一家を語り、匂宮と薫がそれぞれそこに配置され、具体的な人物像への定着がはかられていく。竹河巻と対照的に紅梅巻では匂宮の世のおぼえが強調される。按察大納言の口からそれが繰り返されるところに注目したい。彼は、光源氏を讃美したのち「昔の恋しき、御形見には、この宮ばかりこそは」と匂宮をもち出す。また、「右のおとゞ、我等が見たてまつるには、いと、物まめやかに、御心、をさ

め給ふこそ、をかしけれ。あだ人とせむに、足らひ給へる御さまを。強ひてまめだち給はんも、見どころ少なくやならまし」（Ⅳ二四六）と、ずいぶん匂宮をもちあげており、好意的解釈といわねばならない。これは明らかに匂宮との婚儀を願う親のひいきめだ。匂宮は真木柱の連れ子の宮姫君を望んでいる。が、大納言は実娘の中君に匂宮が懸想していると誤解する。なぜ行き違いが生じたか。匂宮が若君に、「『せうとを見てのみは、えやまじ』と、大納言に申せよ」（Ⅳ二三七）と語るが、それを大納言は中君を指すと思ったことがきっかけであった。さらにもう一度行き違いをみせる。大納言は匂宮には紅梅の花がふさわしいと考え、その花を贈る。ところが匂宮は、「ひんがしのつまに」ある紅梅だから宮姫君の象徴であると受けとった、というものである。[11] しかし、行き違いが起こった根本の原因は、大納言の意識の中に、世のおぼえ絶大な匂宮と実娘を縁づけたい、という強い願望が潜んでいたためと考えるべきではないだろうか。

ここに先行の継子いじめ譚との強い類似性を指摘することができるように思われる。住吉物語では、少将が継子の姫君を懸想しているにもかかわらず、継母などの画策により実娘に通うことになる。ここでは実父は関与しないが、「世にすくれたる人」である少将を実娘の方と縁づけようとするのは、紅梅巻と同じである。また、後代のものであるが、御伽草子（美人くらべ、ふせや、[12] など）や、「昔話」（皿々山、[13] など）にも、貴人が美質をもつ継娘の方を求めているにもかかわらず、継母などが実娘との婚儀を押し進めようとする類型がみられる。実娘への偏愛と、継娘への冷遇。これは継子いじめによくみられるものであり、平安朝にも数多く流布していたものであったろうと推測される。

紅梅巻では継父の大納言が継子いじめをする者とは描かれていない。実娘への偏愛、継娘への冷遇は、露骨には表れていない。しかし、住吉物語や他の例と比べれば、この骨子は継子いじめ譚と何ら変わらない。匂宮が継娘に懸想するのも類型的なままである。源氏物語が継子いじめを中心にすえるような物語とならなかったのは、継子いじめがなくなれば継子は救われるのだ、とは考えていないからであろう。しかし、紅梅巻は継子いじめ譚そのものになってしまっている。源氏物語は、継子から女の存在の不安定性をとりあげようとしている。継子いじめを描くのが眼目ではない。宮姫君はその存在の不安定性を深く印象づける設定になっている。藤井貞和氏が指摘されたように、真木柱と大納言との、また故北方と大納言とのどちらの子でもない、真木柱の連れ子という身の上である。[14] しかも、真木柱自身が不遇な継子的な過去があり、その影をいやおうなくひく姫。実母がいても薄幸な影は消えないというのであろう。宮姫君

が身の不如意を深く嘆くのは至極当然のこととして受けとられたろう。独創的な宮姫君の不安定な位置の設定は与えられたが、その不如意を嘆くというのだけにとどまっている。継子いじめ譚の変奏が成功しているとはいえないのである。先行の継子いじめ譚の枠を超え出ていないという限界をもっている。が、ここではそれ以上の変奏化を試みるつもりがなかった、ということかもしれない。より弱い立場の姫君を設定し、その不如意な境遇が重ければ重いほど、身分高い男の懸想によっても、その女の救済は困難なものとなる、という認識の提示だけが眼目とするところであったのではないだろうか。不安定な存在感を背負う継子は誰によって救出されうるのか。大納言の目には見えなくても、匂宮が単なる「すきたる方に、進み給へる」人物であれば、宮姫君の拒否は根拠をもつことになり、そうした両者に恋物語の進展の契機はないということである。後続する宇治の物語は、この相手が薫であったならばどうなのか、と問うとき導き出されてくるのであろう。紅梅巻では、宮姫君の憂悶に沈む姿や存在の形が、先行の継子の類型の中に埋没してしまっているし、また、対現実や対男性といった外界とのかかわり方は保留にされたままになっている。つまるところ、ここでは宮姫君と匂宮との関係に対する認識を大まかに示そうとした、そういう性格をもった巻であることを確認しておけばよいのであろう。

平安中期には継子をめぐる物語が広く流布していた。そうならば、大和物語百四十二段は、継娘が世を憂う姿を抽出し、そこだけを大写しにしたものといえよう。継子いじめ譚の一部抽出、変奏が行われつつあった趨勢が考えられる。源氏物語も、求める主題にそって変奏を試みていた。石川徹氏によれば、その後の継子ものは変奏化が行われるだけだという。[15] その契機となったのが源氏物語ではないか。紅梅巻もその一つに位置づけられるはずである。その変奏化は例えば、父母を亡くした大君が中君の母がわりになろうとし、継子の不安定な存在を担うことになる橋姫の物語、母は存命しているが、その導き手によってかえって不幸を招く浮舟の物語[16]など、さまざまに問題を堀り起こしていくことになるのである。

三、竹河巻と薫

匂宮巻を受けて薫の人物造型は竹河巻で具体化される。とりわけ薫の姫君たちとのかかわりが語られる。薫と夕霧の子息蔵人少将は、玉鬘の娘大君に思いをよせているが、二人は恋の姿勢において対照的に設定されている。薫は、「世の常のすき〳〵しさも見えず、いと、いたうしづまりたるをぞ、こゝかしこの若き人ども、口惜しう、さう〳〵しきことに思ひて、いひ悩ましける」（Ⅳ二五五）と語られる。先の匂宮巻で薫は、最晩年の光源氏から受け継いだところの、

恋や現世への「まどひ」の行く手行く手をふさいでいく道心を抱えもたされていた。「まどひ」とは、本来、対象への激しい執着心と、それに伴う心の惑乱を意味している。光源氏が「まどふ」ことによって、日常的諸関係を超え、非日常の時空を現出し、そこで女君との交情が可能となるのであった。が、光源氏の老いと作者の現実認識の強さが、そうした「まどひ」を相対化させ衰弱させていった。もはや、「まどひ」によっても男女の交情の時空が現出しないという認識である。光源氏の最晩年の姿が薫に受け継がれているのはこの点である。薫は道心をもつことで、現世や恋への惑乱＝「まどひ」が弱められる。それに対して、恋に激しく「まどふ」人物として描かれるのが蔵人少将である。「人はみな花に心を移すらん独ぞ惑ふ春の夜のやみ」（Ⅳ二六二）と詠む。大君院参の事実を聞くと、「死ぬばかり思ひて」（Ⅳ二七〇）というありさまで、また「花を見て春は暮らしつ今日よりや繁きなげきのしたに惑はん」（Ⅳ二七三）とも詠む。少将の姿に柏木像が重ねられているという指摘[17]があるが、少将は戯画化されており、「まどふ」男自体を相対化しようとする意図が明らかである。柏木の激情の姿もここでは相対化の視点にさらされている。蔵人少将の浮薄な「まどふ」姿を描くことによって、薫の冷静、沈着さが印象づけられることになるという意図がみられる。

蔵人少将は薫を、「人は、かうこそのどやかに、さまよく、ねたげなれ」（Ⅳ二七一）と評する。薫も大君を恋慕していた。けれども、大君の院参を知っても冷静さを失わない。「いと、心、惑ふばかりは、思ひ入られざりしかど、口惜し）うは、思えけり。」（Ⅳ二七八）。「口惜し」とは思うが、「心、惑ふばかりは、思ひ入られざり」という。少将の「まどふ」姿と薫のそうならない姿とは象徴的な対照を示す。しかしここですでに、恋に心を傾けようとしても道心がそれをはばみ、それゆえ、その恋が破綻に終るとき、自分が全霊的になっていないために傷つくこともない、という自己保存的な形姿がみられるのではないか。それは、都の権勢的関係の中では、権勢を積極的に求めはしないが、あえて拒絶もしない、という姿勢とも重なってしまう。薫が、恋や現世への激しい「まどひ」をもたないのは、夕霧のごとき「まめ」（日常的公的秩序に忠実で従順であること）の温存のためではなく、あくまでも深く重い道心を抱えもつゆえであると、匂宮巻では語られた。「まどひ」の衰弱は、一方の極である「まめ」の増幅を引き起こしがちである。夕霧はその代表であったが、その陥穽から引き上げられているのが薫であった。夕霧的な「まめ人」との距離がはかられている。ここに薫の独創性を読みとるべきである。しかし果たしてその陥穽から真に抜き出しえているか。この問いかけが竹河巻ですでに提出されている。その

中で、結局のところは、都では自己保存的な性格を露にしてしまう、ということを物語は見抜いていったのではないだろうか。

光源氏においてかつてそうであったように、恋の「まどひ」が、都の身分的秩序を超えて、男女の交情を可能にする核であったことを思えば、「まどひ」を保てない男が、都において、深い宿世観に陥った女を救済することが可能か。薫が都以外の地においてしか独自性を発揮できないのはそのためである。しかし、そうして必然的に導かれる宇治の物語ではあるが、そこにおいても結局、都では権勢的諸関係に左右される一人でしかないことを大君の関係拒否を通して、薫像に鋭く突きつけるのである。物語は、最晩年の光源氏の課題を受け継ぐところの薫を新たに創造しつつも、竹河巻を語ることを通して、その危うさを感じとっていたのであろう。竹河巻は薫の二十三、四歳ほどの年齢までを語り、紅梅巻は匂宮の二十四、五歳あたりの姿を語る。[18]それぞれ宇治の物語の前半部、橋姫物語と重なる。多くの矛盾を抱える二巻であるにせよ、紅梅・竹河巻の世界を、宇治の物語と重ね合わせようとしていることは明らかである。紅梅巻で提示された問題や、竹河巻におこる権勢の衰退した玉鬘一家における、後見なき姫君ゆえに招来される不幸、また、薫像のもつ危うさ、これらを宇治の物語全体に、影のように底流し続けるもの、として敷設したのではないだろうか。[19]竹河巻冒頭の、女房の語り口にみられるように相対的視座がありうるという提起は、[20]先行する正篇に対しても、後続する宇治の物語に対してもそれぞれ向き合っている、という竹河巻の世界の位置を語っているのである。

四、小野から宇治へ

竹河巻で都での薫の姿を語った後、物語の舞台は宇治に移る。宇治に移される要因のすくなくとも一つは、権勢的諸関係がない地を、恋物語を語る源氏物語が要請したからである。それは夕霧巻を検討することで明らかになる。

落葉宮は母が存命しているが、その憂悶の淵源には不安定な存在感を孕む継子の姿が影を引いている。紫上の述懐「女ばかり、身をもてなすさまも、所せう、あはれなるべきものはなし」（Ⅳ一四二）も、落葉宮と紫上との共通する憂悶の影が映し出されている。落葉宮は小野の地で懸想し続けてくる夕霧と対座する。宮は自分の「身の憂さ」を訴え続ける。夕霧は何とか自分のものにしようと必死になるが成就しない。宮は後見弱き自分を思う。夕霧はその点も計算して、継子の救助者のように物質的援助を忘れない（Ⅳ九六）。夕霧の恋の「まどひ」（Ⅳ一六八など）は、自分の体面を保とうとする姿（「もし、なほ、本意ならぬ事にて、尼になども、思ひなり給ひなば、をこがましうもあべいかな」Ⅳ一五七）から、「まめ」を

超え出ようとする真に力強く激しいものではないことがわかる。宮の重い宿世観は夕霧によっては救い出すことが困難なようである。小野の地においては、宮も相手に自己の存在の重みを訴えることがいくらか可能であった。夕霧もそこでは一個の裸形の男君として宮に自己の思いを語っていったのである。しかし、都に帰邸を強いられた宮は、いっきょに夕霧をとりまく権勢家たちの思惑の渦巻く世界に踏み込まれることになる。朱雀院は後見なき者の弱さを強調する（Ⅳ一四五）。それを証するかのように、花散里が、父致仕大臣が、権勢を背景に動き出し、宮を追いつめる。雲井雁が権勢家の姫君であることを強く印象づける。大臣は、「契（り）あれや君を心にとゞめおきてあはれと思ふらめしと聞く」（Ⅳ一六七）と、宮に詠みかける。宮は行き場を失うほかない。

物語が膨大になったのは、落葉宮が自己の内面を主張しようとし、夕霧もそれに対応していたからであった。それは小野の地であったから可能なのであった。都に場が移ることによって、権勢家として生きる「まめ人」夕霧と、後見なき一介の女君、という関係に帰着するだけであった。そこでは宮の内面など何の意味ももちえないことが痛感されるだけであった。こうした関係に収束するほかないことは当初から透けていたことだったろう。しかし、夕霧巻が開示していった問題は重要である。物語は、かつての光源氏的世界ではない、「まどひ」によっても日常性を超ええない、現実的次元の人間の恋物語を描こうとし始めている。それゆえ、男と女とが対等に出会うことを物語は押し進めようとしていた。そのためには女が自己の内面を主張しうる場が必要であった。小野の地が選ばれはしたが、結末は、夕霧が権勢内にとどまる人間であることによって、落葉宮は依然として救われることなく終る、という状況を確認することになってしまったのである。

物語は再び都を離れて、宇治の地で、現実や恋の「まどひ」の行く手行く手をふさぐ道心を抱えもつ男君と、不安定な存在感と宿世観に陥った女君とが対等に出会う恋物語が語られようとしていくのであった。

五、橋姫物語と紅梅・竹河巻

薫は俗聖とよばれる八宮を法の友として宇治に通い始める。そのおのづからなる延長として姫君との対面が語られていく。

秋の末つかた、（中略）有明の月の、まだ夜深くさし出づるほどに、（中略）入りもてゆくまゝに、霧りふたがりて、道も見えぬ、しげきの中を、わけ給ふに、いと、荒ましき風のきほひに、ほろ〳〵と、落ちみだるゝ木の葉の露の、散りかゝるも、いと冷やかに、人やりならず、いたく濡れ給ひぬ。　Ⅳ三一〇

薫は、「夜深」き、「霧」によってかもし出された、混沌とした世界に入り込んでいる。感情の誘われるままに、「山おろしに堪へぬ木の葉の露よりもあやなくもろき我（が）涙かな」（Ⅳ三一一）と薫は詠む。続いて、「かく、濡れ〳〵まゐりて、いたづらに帰らむうれへを、ひめ君の御方にきこえて、『あはれ』と、の給はせばなむ、なぐさむべき」（Ⅳ三一二）と、姫君との語らいを自然に求めていくように描かれている。薫にはこの宇治の地が都とは隔絶して、非日常的な世界と感じられる。この箇所に先行して宇治の自然は、「いと、荒ましき水の音、波の響きに、物忘れうちし、夜など、心とけて夢をだに見るべき程もなげに、すごく吹きはらひたり」（Ⅳ三〇九）と、むしろその荒涼たる姿が語られていた。かつての六条院の四季という整序立った自然は、光源氏の終焉とともに、もはやありえぬものと物語は深く認識していたはずである。浮舟の物語で現れる自然にもそれは貫流している。物語作者内部の自然とは、おそらくこうした荒涼としたものと化しつつあったと思われるのである。薫はその生々しい、荒々しい自然をみてはいない。自分に都合のいい自然だけを抽出している。姫君と対面し接する要因が、恋に「まどふ」ことによってではないことを物語は深い配慮で描き進めているのだ。男と女との新たな対座の姿を物語は求めている。そのために、橋姫物語では、都とは隔絶した別の時空として薫が立ち現れ、薫の主情で物語全体がおおわれ、導かれるように語られていくのである。竹河巻でみられた、都での薫の姿を全く遠くへ押しやり、あるいは払拭して、「あはれ」を求める男として身を変じているかのごとくである。薫自身、自分が変化（へんげ）し、別の時空に迷い込んだと感じている。姫君を垣間見たとき、先行物語なら、心が「まどふ」とされる（例えば、伊勢物語初段）ところが、「心移りぬべし」（Ⅳ三一五）と語られた。物語の深い配慮がいきとどいた言い換えだ。薫は姫君に応対を求める。姫君は、「霧の紛れなれば」（Ⅳ三一六）、つまり「姿を朧化する霧ゆえ」（小学館本頭注）薫と対応することにした。が、薫はこのときのことを「霧にまどはされ侍りしあけぼのに」（Ⅳ三二八）というように、彼自身が「霧」に没入してしまっていた、と思っている。ここに微妙ながらくい違いがある。薫は夢の世界にいるかのような意識だ。宇治の世界を勝手に自己の主情でおしかぶせてしまっている。注意すべきは、姫君たちにとっては宇治は自分たちの生きる重い現実そのものであるということであり、両者のくい違いは決定的に重要な意味をもつ。出生の秘密を語る弁の君に対して、「あやしく、夢語り、巫女やうのものゝ、問はず語りすらむやうに」（Ⅳ三二〇）「夢のやうにあはれなる昔語り」（Ⅳ三三一）と感じるのが薫の姿である。かつての垣間見を薫は、椎本巻で、「ほの見し明けぐれ」（Ⅳ三六二）と思い返す。が、橋姫巻での垣間見

は「明けぐれ」ではなかった。ここに、垣間見などという、道心をもつ者にとってはあってならぬことを、非日常的な、混沌とした「明けぐれ」の時空に封じ込めようとする姿勢が露呈しているのではないか。ともかく、薫は以上のような周到な設定を経てはじめて、宇治の姫君たちと向き合うことができるのであった。物語は両者を対等な位置において出会う恋物語を語るための努力を惜しんでいない。しかし、すでに見えていたように、薫の姿勢や内面的動きを客観的に見据え、あやつっている作者がいることにも留意しておかねばならない。そして、薫の存在のあり方を問いつめる視点をもっているのが、実は物語においては大君なのである。

大君は、椎本巻で匂宮による弔問のとき、「なべて、いと、つゝましう、恐ろしうて、きこえ給はず」（Ⅳ三五九）と、男との接触に不安を抱き、恐怖感さえ抱いている。総角巻冒頭で大君は薫に、『なほ、かゝるさまにて、世づきたる方を思ひ絶ゆべく、おぼしおきてける』となん、思ひ合はせ侍れば、ともかくも聞えんかたなくて」（Ⅳ三八三）と、現世での生き方を断念していると告げる。また心劣っている（Ⅳ三八三）と自認する。こうした姿に、早く母と死別し、さらに父も亡くした大君の、継子的な孤立感、不安定感などの系譜が感じられる。大君は中君の後見役となることを考える。後見なきゆえの弱さは、継子をめぐる物語の説くところであり、源氏物語もそれを手づるに深めてきたことであった。大君は中君を薫にと願う。「さるは、少し世ごもりたる程にて、深山隠れには、心苦しく見え給ふ人の御うへを、『いと、かく、朽木にはなし果てずもがな』と、人知れず、扱はしくおぼえ侍れど、いかなるべき世にかあらん」（Ⅳ三八三）と。「朽木」に自分はなってもいいという。「朽木」となって生涯を終える、というのは、大和物語や紅梅巻の宮姫君などの、継子の憂悶する姿を想起させる象徴的な語だ。大君が集中的にその憂悶を背負っていることを記憶にとめておきたいのである。大君の願いは果たされず、中君は匂宮と結婚し、匂宮の夜がれへと事態が進む。憂慮したことが現実となり、大君は深い宿世観に陥っていくことになるのであった。

大君と薫の関係はどうか。薫が匂宮と申し合わせて寝所に入った夜は、「山鳥の心ちして、明かしかね給ふ」（Ⅳ四一七）という状態だった。「山鳥の心ち」とはひとり寝の寂寥感がこめられた表現で、二人の隔たりを示している。実はこの表現が、夕霧と落葉宮との一夜にも使われていた（Ⅳ一五一）が、似た側面をもつ両者であった、ということを思い合わさせようとしている。しかし、大君は薫を嫌っているわけではない。「心ばへの、のどかに、物深く物し給ふを、『げに、人は、かくおはせざりけり』と、見あはせ給ふに、『有（り）がたし』と、思ひ知らる」（Ⅳ四三一）と心傾ける。

続けて、「猶、ひたぶるに、いかで、かく、うち解けじ。『あはれ』と思ふ人の御心も、かならず『つらし』と、思ひぬべきわざにこそあめれ。われも、人も、見おとさず、心違はでやみにしがな」と思ふ心づかひ、深くし給へり」（Ⅳ四三二）と述懐する。現在のこの状態のまま「心違はでやみにしがな」でありたいという。薫に好意を寄せつつ、その極限で拒否を貫徹したのだった。ではその拒否の核心は何であったろうか。

ここで橋姫物語に年立的にも重なる紅梅・竹河巻の世界が想起されねばならない。竹河巻は、玉鬘一家が権勢から隔絶され、それゆえ、大君院参、中君入内も不幸のうちに終っていく、そうした都の世界が語られていた。権勢のない、後見のない姫君たちの不幸である。玉鬘一家と冷泉院との交流は、冷泉院と八宮一家との交流を誘い出す契機となっていた。それだけではない。年立上の重なりは、八宮の姫君と都の貴顕との婚姻も不幸のうちに終るであろうことを暗示していたのである。紅梅・竹河巻は、宇治の橋姫物語を読み進めていく過程で、幾度も思い返されながら、そのことで宇治の物語に意味や影を投げかけていく、そういう構造をもっているのではないか。匂宮・紅梅・竹河巻の春夏の季節は都を象徴し、橋姫巻以降の秋冬は宇治を象徴するという。[21]であるなら、より注意すべきは、物語は、この春夏と秋冬を合わせて統一的に読みとることを要請しているということであるはずだ。一方が表で一方が裏であるというのなら、人物の全体や物語の全体というものは、まるごとにして表と裏とを統合的に読んでいくことでなければならない。薫の、都でのあり方と、宇治でのあり方とを、あるいは、都そのものの実像と、宇治そのものの実像とを、統合的に見据えているのが、大君であり、語り手でもある。薫にとっては宇治という非日常の中では行為しうるが、日常的、現実的な都では、先に論じたように、恋においても権勢においても、自己保存的な形姿を浮かびあがらせていたではないか。薫は宇治を都とは異なる時空であると感受していた。薫はいつまでもその世界では、姫君へ向かうことができたのである。たしかに宇治の場においてだけなら薫は独創的人物であった。大君が心傾けるに足る人物であった。が、薫の独自性が都ではいっきょに色あせるであろうことを、作者は大君の拒否を通して突きつけようとしているのである。「『あはれ』と思ふ人の御心も、かならず『つらし』と、思ひぬべきわざにこそあめれ」とは、薫が大君以外の女性に心を移すことを指すのではない。宇治の地という限定の中では、「あはれ」でありえても、限定を排除した都では、「つらし」と思わせる薫の存在のあり方だ、ということではないか。薫自身は無自覚だ。大君は見抜いている。彼女は、宇治の地を離れない限り、薫の独自性と対座できるからこのままでいたいと思う。八宮の、「こ

の山里をあくがれ給ふな」（Ⅳ三五〇）という遺言はそれと呼応した、核心的言辞であったのだ。

竹河巻では、薫の自己保存的な姿勢が恋の場においても、政治の場においても表れることが暗示されていた。また、後見なき姫君が権勢的な諸関係の中では不幸を招く、などといった都的状況は、年立上からも、宇治の物語を貫流するもう一つの面であった。こうした都的状況は、この竹河巻だけが提示しているのではない。冷泉院の女一宮や明石中宮の女一宮の記述の意味もそうであった。また、匂宮の背後には都的世界がはっきりと見えていた。匂宮の場面が春であったのも肯首できる。紅梅巻も椎本・総角巻あたりと重なり、重い意味を投げかけていたのであった。

大君の結婚拒否の核心とは、宇治での薫の美質を受け入れつつも、その薫自身と、それをとりまく、権勢的な都の世界に対しては、厳しく拒否の姿勢を堅持する必要があった、ということであろう。

宇治の物語は、権勢から離れた、対等な男と女とをぶつからせる恋物語として設定された。男は、激しい「まどひ」を衰弱させてしまい、行く手行く手をふさいでいく道心を抱えている。女は、継子いじめ譚の現実化の中でますます正しいものとなってしまった生き難さや不安定的な存在感をもち、深い宿世観に陥っている。男の背負っている課題と、女の背負っている課題とが、それぞれ対等と呼びうるほどにその意義を主張し、お互いに譲らない、そのような恋物語を描こうとした。それが橋姫物語の主題であった。しかし、都という現実の存在が絶対的な枷となって物語を、そして作者をおおっていることを再度確認する結末になってしまったのである。男によっても深い宿世観を背負った女を救済することができない、ということを語っているともいえよう。橋姫物語の後、作者は対等な男と女の恋物語を語りはしない。浮舟物語では、ただ一条、浮舟の生き難さを追いつめることに視座が変移していくのであった。

① 空蟬「幼き程に後れ侍りて」（Ⅰ九一）、夕顔「親たちは、はや、失せ給ひにき」（Ⅰ一六六）、紫上「もとの北の方…なくなり侍りにし」（Ⅰ一九〇）、末摘花「故常陸の親王の、末にまうけて」（Ⅰ二三六）。本文は岩波日本古典文学大系本による。（　）内は巻数と頁数とを表す。その他の作品も、注記がない限り、大系本本文と頁数による。

② 基本的には、古本が現存本と余り違わないとする立場から論をすすめる。堀部正二『中古日本文学の研究』、石川徹「古本住吉物語の内容に関する臆説」（中古文学3号）、藤村潔『古代物語研究序説』など。また、本文は、横山重校訂『住吉物語集（本文篇）』所収の二写本（藤井博士蔵）による。

③ 高橋亨「可能態の物語の構造」（日本文学73・10）。

④ 倉塚曄子『巫女の文化』で「親族組織における縦の血縁関係でもっとも密なのは母子」と述べている。母なき子の不安定性が考えられる。

⑤ 松本隆信「住吉物語以後」（文芸研究3号）、広田収「物語とカタリの構造」（日本文学78年11月）。

⑥ 石川徹「継子ものとその周辺」（国文学　昭42・12）、上坂信男「光源氏像の両面」（『源氏物語を中心とした論攷』所収）。
⑦ 高群逸枝『招婿婚の研究』一。
⑧ 「結婚拒否の物語序説」（へいあんぶんがく　昭43・9）。
⑨ 注②藤村論文。
⑩ 紅梅・竹河巻は作者別人説やその矛盾的性格が論じられているが、現存巻序を認め、その内的意義を考えていきたい。
⑪ 藤井貞和「匂薫十三帖の冒頭をめぐる時間の性格」（へいあんぶんがく　昭43・9）に詳論されている。
⑫ 横山重、太田武夫校訂『室町時代物語集』第三によった。
⑬ 関敬吾『日本昔話集成』第二部によった。
⑭ 注⑪に同じ。
⑮ 注⑥石川論文。
⑯ 藤河家利昭「浮舟物語と住吉物語」（国文学攷　昭50・3）に、継子の問題とのかかわりが触れられている。
⑰ 鷲山茂雄「匂宮・紅梅・竹河三帖論」（国文学研究　昭51・6）など。
⑱ 森一郎「源氏物語の構想の方法――匂宮・紅梅・竹河の三帖をめぐって」（国語と国文学　昭42・10）。
⑲ 篠原昭二「第三部」（講座日本文学　源氏物語　下）に、若干触れられている。
⑳ 木船重昭「『宇治』への道」（日本文学　75・11）。
㉑ 三田村雅子「源氏物語第三部発端の構造」（日本文学　75・11）。